

2021年横浜ナザレン教会・聖霊降臨節第六主日(6/27)礼拝
「闇を見つめる方」ルカ福音書第22章47節から第22章53節

【聖書】

ルカによる福音書22:47 イエスがまだ話しておられると、群衆が現れ、十二人の一人でユダという者が先頭に立って、イエスに接吻をしようと近づいた。48 イエスは、「ユダ、あなたは接吻で人の子を裏切るのか」と言われた。49 イエスの周りにいた人々は事の成り行きを見て取り、「主よ、剣で切りつけまじょうか」と言った。50 そのうちのある者が大祭司の手下に打ちかかって、その右の耳を切り落とした。51 そこでイエスは、「やめなさい。もうそれでよい」と言い、その耳に触れていやされた。52 それからイエスは、押し寄せて来た祭司長、神殿守衛長、長老たちに言われた。「まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持ってやって来たのか。53 わたしは毎日、神殿の境内で一緒にいたのに、あなたたちはわたしに手を下さなかった。だが、今はあなたたちの時で、闇が力を振るっている。」

1 命の時

ご葬儀が続ききました。人の死に立ち会う時は、命と死を見つめる時、命の造り主である神を思う時です。死と命を思いつつ、今日の聖書テキストを繰り返し読んでいますと、最後の言葉が心に残りました。「だが、今はあなたたちの時で、闇が力を振るっている。」「闇」という言葉が、死や滅びを思わせるからでしょうか。

「闇」の最大の特徴は、なんでしょうか。滅びや死という「光がないもの」、生命がないものが見えなくなるということでしょう。闇の中にいる人には、滅びや死がどこに潜んでいるのか分からないのです。だから生きる為にどちらに進んでいいのかも分かりません。そんな闇の様子を、昨日の西原アツ姉妹のご葬儀では、巨大迷路の譬えで話しました。人の身長以上の壁で造られた巨大な迷路。アトラクションとしての巨大迷路には、スタッフがいて、脱出経路が用意されています。ですが、本物の迷路、迷宮は恐ろしいものです。ギリシャ神話に出てくるような迷宮では、入って行く人を迷いに迷わせて遂には暗闇の中で死を迎えさせることを考えて造られました。自分がそんな迷宮に迷い込み、必死に出口を探すけれども脱出できず暗い中、命が尽きる事を考えるだけで恐ろしくなります。

今日の場面に出て来る闇の力に支配された人々、本人たちは気づいていませんが、そんな死の迷路に迷い込んだ者です。ですが、そんな闇に呑み込ま

れていない方がいました。闇の外、光の中に立つ人だけ、迷路に迷い込んでいない人だけが、「闇が力を振るっている。」と言えるのです。今日の場面では、主イエスのみが、闇に飲み込まれてはおられませんでした。確かに、主イエスは逮捕される者であり、この場面で最も窮地に陥っているように見えたでしょう。しかし、この場の状況を支配していたのは、誰であろう、敵に逮捕されようとしていた主イエスでした。主イエスが、闇の力に支配されている者、今しも呑み込まれようとしている者達に対し、どのような言葉を語られたのか、を聞いていく事は、時に主イエスを忘れ、闇に呑み込まれかける私たち、死の迷宮に迷い込む私たちが、命への道を見出し、迷宮から脱出する事に繋がるのだと思います。

2 ユダに対して

オリーブ山で、主は、父なる神に跪いて祈っておられました。「私に迫り来る十字架を、どうかとり除いてください。」罪人の中の罪人として神に裁かれ滅ぼされること、滅びの中の滅びを引き受けることを正しく恐れることができたのは、神の独り子だけでありましたから、主イエスは必死でした。そして、この祈りは、戦いでもありました。神の独り子であり、尚且つ、まことの人である主イエスしか戦えない戦い、罪と死に勝利する為の戦いを主は一人戦っておられました。やがて、主イエスは立ち上がり、眠りこけている弟子たちの所に戻って、話しかけられます。「なぜ眠っているのか、誘惑に陥らぬように起きて祈っていなさい。」主は、弟子たちに次のように切々と話されていました。「闇の力に囚われ、死の迷宮に入りこんでしまわないように、私の甦りの力の内に足を踏ん張って立ち、祈り続けなさい。」

おそらく主イエスが弟子たちにそのように語っておられた最中、周囲から、多くの人々の気配、ざわめきが迫ってきます。現れたのは、十二人の一人、ユダ。弟子たちは、「なんだ、ユダか、脅かすなよ」と声をかけたかもしれません。ユダは、いつものように、主イエスに挨拶の接吻をしようと近づいたからです。ですが、主イエスは、「ユダ、あなたは接吻で人の子を裏切るのか」と仰います。ユダを支配する闇の力を射抜くように。

「接吻」というギリシャ語の語源は、「友愛」という単語ととてもよく似ています。共に生きる友人を大切に思う心、あなたに会えて嬉しい、という喜びを表す接吻。ユダは、神が与えてくださった友情の喜びを、裏切りの方便に使おうとしています。大切な友に裏切られることほど、胸えぐられることがあるのでしょうか。何という残酷な事をするのか、と思うと胸がふさがります。ユダにはユダの正義があったでしょう。彼はイエスを殺すつもりなど

なかったかもしれませんが。ただ、祭司長たちに逮捕させて少し痛い目にあって、反省して欲しかっただけかもしれない。ですが、ユダが、友情の接吻を使って、主を敵に引き渡そうとしたこの時、彼の心は完全にサタンの虜、闇の力にがんじがらめになっており、死の迷宮に迷い込んでいた事は確かでしょう。闇の中では、自分が何をしているかも分からなるのです。そして、私たちは誰でも、ユダになりうる存在です。

ですが、闇の外におられる主イエスは、ユダに自分が今何をしているか気づいて欲しいから、あえて呼びかけられます。「ユダ、あなたは接吻でく人の子を裏切るのか。」ユダがこの主の呼びかけに我に返り、主の御前にひざまずいていたら、彼は甦りの主イエスに出会えていたかもしれない、そう思うのは考えすぎでしょうか。

主イエスは、ユダのように、死の迷宮に足を踏み入れる私たち一人一人も憐み、声をかけてくださいます。「あなたがやっている事は、闇の業ではないのか。救い主を裏切る、それは、自分の命を殺すことではないのか。あなたは滅んでよいのか」救い主イエスの真の友愛の叫びこそ、ユダになりかける私たちを我に返らせ、死の迷宮から引き出す声ではないでしょうか。

3 武器を取る弟子たちへ

さて、主の言葉に、改めて自分たちが置かれている状況に気づいた弟子たち。この人々は、神殿で主の教えを聞いていたような味方ではない、それどころか、主イエスと自分たちを逮捕しようと押し寄せてきたという事に遅まきながら気づきます。弟子たちが混乱したのも無理はありません。まさに寝込みを襲われたようなものでありますから。そして、これは私たちもよく経験することですが、混乱に陥って状況が把握できていない者ほど、容易に、実にあっさりと、闇の力に引き入れられてしまうものです。彼らは、主イエスに「剣で切りつけましょうか」と声をかけるのですが、既にその手は剣にかかっていたでしょう。

ですが、武力に訴えるのは、際限ない力の応酬の始まり。主イエスの弟子たちは、サタンの武器を取ることによって、サタンに乗っ取られている者達の手先に対抗しようとした。闇の力を用いて、闇に対抗しようとしたのです。そうして、自分達が死の迷宮に入り込もうとしていました。だから、主は厳しく言われたのです。「やめなさい。もうそれでよい」

「もうそれでよい」の訳は少し弱いように思います。原語では「それ以上、するな」です。「それ以上してはならない」と禁止の形で強く訳している聖書もありますが、私は、その訳のほうが主の語調をよく伝えているのではない

いかと思います。主は、弟子たちに大声で厳しく、叫ばれたのではないかと思うからです。「闇のほうへ行ってはならない！ 闇に向かって進むあなたがたは私の弟子という立場から離れている、私のもとに戻ってこい！」

主イエスは、弟子が傷つけられた大祭司の手下に手を触れて癒されます。主は、癒しの業を通して、弟子たちに次のように言われているようです。「報復してはならない、他人を犠牲にしてはならない。たとえ剣を振るうことによって、目の前の窮地を脱したとしても、より一層強く闇の力に囚われ、迷宮に深く踏み入るだけ。却って神のご支配を見失い、永遠の命への道を閉ざす事となる、滅びる事となるのだ。私のもとへと戻って来い。」と。

弟子だけではない、現代を生きる私たち、裏切られ窮地に陥り、やられたら、やり返せ！と剣を取る私たち一人一人にも、主イエスはそう叫んでおられるようです。

4 祭司長、神殿守衛長、長老たち

そして、ついに、主イエス逮捕の首謀者たちが姿を現わします。祭司長たち、神殿守衛長たち、長老たちです。主イエスが逮捕できそうだ、と分かって、前面に押し寄せてくるのです。主が逮捕できなそうなら、夜陰に紛れて逃げるつもりであったのでしょうか。その姿に、実は彼らこそ最も恐れと不安にとらわれていることがよく分かります。彼らが闇の力にすっかり絡め取られている証拠です。神の業を行っているのであれば、何を恐れることがありますでしょうか。彼らはサタンに乗っ取られ、サタンの業を行っているからこそ、その心に奢りはあっても、平安はなく、恐れに満たされている。闇の中に隠れて、光のもとでは決して行えない事を行うのです。

「まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持ってやって来たのか。わたしは毎日、神殿の境内で一緒にいたのに、あなたたちはわたしに手を下さなかった。」主は、痛烈な皮肉の言葉で、彼らの真実の姿を指摘します。「あなたがたは、まるで強盗のように私を捕まえにきたが、本物の強盗はあなたがただ」彼らは、自分たちの姿に気づいていません、自分たちは、闇の中にうごめく強盗であるとは夢にも思っていないのです。闇の力が彼らを支配しており、彼らの目は閉ざされています。

5 今はあなたたちの時、闇の力の向こう側

主イエスは続けて言われます。「今はあなたたちの時で、闇が力を振るっている。」主イエスのみが、今という時がどういう時かをご存知でした。それ

は、主イエスが究極的な目標、天の御神の目標をしっかりと見据えておられたから。その目標とは、塵から造られた被造物にすぎない私たち人間に永遠の命の道を開き、神のご支配を完成させること。この目標は、天の父なる御神に従い切り、十字架の上に全ての人の罪を償って死ぬことを通してのみ達成すると主は知っておられた。だから、主は、誰よりも冷静でした。自分に最も近い者達が、卑怯にも親愛のキスで裏切るという試練の時にあっても、究極的な目的を見失わず、神への信仰は揺らがなかったのでしょう。主イエスは、「今は闇が力を振るう」時であると、今の危機に立ち向かう。「今は」です。ずっとではありません、永遠でもありません。神の善き力が勝利をおさめる時は必ず必ず来る。復活の日曜日は近づいている、主イエスの眼だけが、その時を見つめていました。だから、闇が力を振るう時であっても、光の業を、死の迷宮のただ中であっても命の業を行うことができるのです。

それは私たちの力では、できない事です。私たちは、自分たちの力に頼る限り、よくて、せいぜい、この弟子たちどまりです。なんとか、主イエスを守ろうとした弟子たち。ですが、大きな社会的権威、宗教的権威をもった人々が彼らの前に立ちふさがった、巨大な力が自分達を呑み込み殺そうとしていると知って、彼らはパニックとなってしまいました。

しかし、なんとも不思議な事ではありますが、命の道は、私たちが思いもしない方向にありました。神が備えた命への道筋は、私たちの考える事とは全く逆でありました。神のなさる救いは、人の敗北によって成し遂げられ、神の勝利は人を殺すことではなく、あえて死を受けることによって成し遂げられる。神の救いは、征服でもたらされず、神への献身によってもたらされる。そして、命は死を通じて私たちへともたらされるのです。

「死の中にある命への道」というと、パウロの言葉が思い起こされます。「わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることにもなると信じます。」私たちの力では、闇の力に打ち勝つことはできません。それは、私たちの内に、闇を好む心があるからです。人を憎むことを好む心、つまり、神に逆らい自分が神になりたいと思う心がどうしても湧いてくるから。だから、私たちは、そのままでは、キリスト・イエスの力、闇に打ち勝つ力の内に生きることにはできないのです。闇を好む心を葬り去らねばならないから。

冒頭の巨大迷路の話しで言いますと、キリスト・イエスこそ、巨大迷路の中にそびえるやぐらと行ってよいでしょう。救いのやぐら。ですが、私たちの心には、実は「迷路のほうがいい、自分で好きにしたい」という心があるのです。だからやぐらに登ろうとはしない。ですから、イエス・キリストという救いのやぐらに登るには、この迷宮に留まりたいという心を十字架につ

けて滅ぼしてしまわねばなりません。でも、それも自力でできはしない。

だからこそ、救いそのものであるお方、主イエス・キリストが、私たちがそこで途方に暮れて座り込んでいる迷路の真ん中まで降りてきてくださり、私たちの手を引っ張り上げ、共に登ろうとされています。だから、私たちはキリストと共に十字架にかかり、キリストと共に自分の中の闇を葬り去る事ができるのです。「キリストと共に死ねば、キリストと共に生きる」のです。キリストの中にこそ、命の道があります。

昨日、この礼拝堂から天に送り出した西原アツ姉妹は、キリスト・イエスに全てを委ねて生き、キリストに救いのやぐらへと引き上げられ、父なる御神のもとへと帰っていかれました。

私たちも、差し出された主イエスの手を取り、死の迷路から救いのやぐらに登り、そのあとへと続いていきたいと切に願っています。

お祈りします。

命の主よ、

救いの主よ、

私たちが闇の中から導き出してください。

キリスト・イエスにある死を迎えさせてください。

そして、キリスト・イエスにある命に生かしめてください。

主の御名によって祈ります。

アーメン